

台湾雲林県立樟湖生態国民中小学校 視察調査報告書



[樟湖生態国民中小学校の校舎等全体イメージ※学校説明資料より抜粋]

1 視察調査の目的

三島町教育委員会は、台湾雲林県に所在する樟湖生態国民中小学校を訪問し、同校の教育実践、地域との連携、国際教育等の取組について視察調査した。

視察にあたっては、「地方創生の取組」「人口減少・少子化対策」「国際交流」「キャリア教育」を視点に据えつつ、今後の交流に向けた検討材料を得ることを主眼に調査した。

日 時：令和7年8月27日（水）13:30 - 17:00

場 所：台湾雲林県立樟湖生態国民中小学校

参加者：山口教育長、板橋地域政策課長、舟木生涯学習課長、徐 銓軼氏（通訳）、
株式会社とぶひ 大谷啓介氏（台湾交流事業受託者）

対応者：校長 陳清圳氏

2 学校の特徴

樟湖地域は降雨が多く自然災害も頻発する一方、少子高齢化と人口減少が進行している。台湾全土に共通する課題として出生率低下や学力低下、児童生徒数の減少があり、地域コミュニティの維持が困難になっていた。

同校は台湾政府から認定された実験教育校であり、定められた教育要件を満たせば、学校が独自に構築した教育プログラムに取り組める指定校である。日本でいう小学生から中学生が通う全寮制となっており、9年間を一貫した教育が受けられる。かつては廃校寸前にまで追い込まれたが、陳校長による学校改革や地域・企業の支援により再生し、2006年に24名であった児童生徒数は2025年には160名（小学生58名、中学生102名）に増加するとともに、県外からも入学希望者が集まる状況となっており、入学は雲林県内の子どもを除き抽選制となっている。生徒数が増えた要因として、①教育プログラムが他校と異なること、②先生の個々の能力を伸ばすこと が挙げられた。



3 特色ある教育プログラム

○伝統文化の継承

かつて地域産業であった竹紙づくりを復活させ、授業の中で児童が紙漉き体験を行うなど、学校を拠点とした文化継承を推進している。

樟湖は原材料となる竹が多く生育しており、水も豊富という環境が適していた。最盛期には 12 件の製造業者がいたが、1950 年代の産業近代化により廃業が相次いだ。竹紙づくりの製法は 1960 年から 60 年ほど途絶えていたが、学校を拠点にものづくり文化を学び、伝承する仕組みづくりに取り組んでいる。



〔竹をハンマーで繊維状にして竹紙をつくる様子〕

○PBL (Project Based Learning＝課題解決型学習) の導入

PBL とは、アメリカの教育プログラムを基礎として、生徒自身が課題を見つけ、その課題を自ら解決する能力を身に付けることを目指した学習方法であり、現実社会の課題を題材に学習を行っている。

同校の例として、地域特産物を活用したレモネードやジュース開発のほか、3,000m級の山を登るプログラムや5年生から参加する自転車挑戦（500kmを5日間で走破、宿泊は神社や他校校舎、自己負担1万円程度）などを教育課程に取り入れ、どんな苦境でも自分で解決できる危機解決能力の向上に加え、問題解決能力・自己成長・協働性を養っている。



○地域との連携

高齢者や社会的弱者への支援、地域産業への協力など、学校活動を通じて地域課題の解決に取り組んでおり、児童・生徒は年間10回以上の社会奉仕活動に参加している。



具体例としては、コーヒー滓を蚊取り線香に加工してコミュニティに配布している。こうした活動がコンテストなどで入賞することがあり、教育機関から評価され注目を浴びている。

○企業との連携

エバー航空（EVA Airways）などの寄附により教育活動を持続可能なものとし、企業との連携を通じて教育の質向上を図っている。

エバー航空との関係は、台風の被害が出た際に積極的に陳情する地域の人物がいたことが寄附につながり、最終的に2億 TWD（約 10 億円）の寄附を受けた。ただし、寄附条件として、社会的に弱い子どもたちを 50%入学させること、知能が高い子ばかりを入学させるのではなく、教育を通じた成長を促すことが挙げられた。

○国際教育

同校では国際教育を重視しており、日本語の授業も行われている。

インドネシア、カンボジア、日本（千葉大学、岩手県岩泉町中学校）などと交流実績があり、保護者の中には同校の国際教育を評価し、子どもが外国に行ける機会を望んでいる。この考え方は、国際的な経験により人間力を高めることにつながるという認識がある。なお、協定締結は必須としておらず、まずは試行的に交流を進めている。



○先生の成長支援

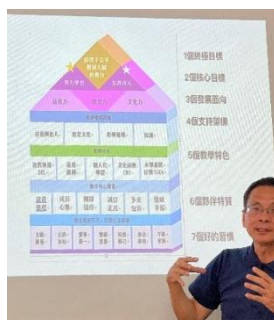
先生の生涯的な成長を促す支援に取り組んでおり、自己の成長や能力向上のための取組であれば資金面も含めてサポートしている。また、三島町の工人まつりにも同校の先生が研修として参加している。

問題解決能力や人とのつながりを持つ人間を育てるには先生が担う役割が大きく、先生の視野を広げるためにも大学などの教育機関との連携を重要視しており、先生の実力向上がコミュニティ活力の向上につながるとも考えている。

4 教育理念と成果

同校の教育目標は、最上位に「誰にも天賦の才能（生まれながらにして備え持っている才能）があり、発揮する舞台を与える」を掲げ、最上位目標を支える形で「学習力」「品格力」「文化力」の向上を掲げている。また、学力だけでなく、社会への関心や人格形成を重視している。さらに、教師の生涯的な成長支援を行い、「良い教師がいれば良い生徒が育つ」との信念のもと、大学等と連携した教員研修にも力を入れている。

これらの実践が保護者から高く評価され、結果として生徒数の増加につながっている。



- 1 個共同目標
- 2 個学習目標
- 3 個核心能力
- 4 個教學構面
- 5 個教學特色
- 6 項核心價值
- 7 個好的習慣



[教育理念を説明する陳校長と意見交換の様子]

5 今後の方向性

同校は、地域資源の活用、PBL の徹底、国際教育の推進により、生徒数を増加させ、地域に活力をもたらしている。少子化・人口減少は両地域共通の課題であり、教育を通じた地域活性化の視点で学ぶ点が多く、特に PBL を通じた課外活動や地域課題解決型の学習は、本町の教育にも大いに参考となったとともに、児童生徒の主体性を伸ばし、地域社会と結びつける教育のあり方を考える上で示唆に富む事例であった。

今後の交流については、オンライン及び現地交流いずれの形も可能とされており、今後、交流の検討を進める一方で、本町においてさらなる質の高い学びの実現においては優先順位を設けて取り組む必要がある。具体的には、小中学校切れ目のない教育課程の中での国際教育がより効果的かつ持続的と考えられることから、小中一貫教育を目的とした義務教育学校創設を検討し、9年間をととした総合的な学習及び探求的な活動の体系化とともに、国際教育についても組み入れる方向性をもって取り組みを進める。

